

## 【各研究チームの報告】

特別活動等についての研究チームの報告

## IV 特別活動等についての研究

研究の仮説で示したように、「授業・特別活動等において、物事を自分のこととして捉え、みんなで力や知恵を出し合い、協力して乗り越えていく活動の経験を積み重ねていくことで、豊かな自治的活動へとつながり、未来の社会をつくる「学びの主体者」を育成していくことができる。」と考えている。この文章が示すように、授業・特別活動等においてバランス良く実践を積むことが重要である。

特別活動等の研究においては、特に「学級活動」に重点を置いて研究を進めた。それは、学級活動で得られる様々な学びが、教科の学習の質的向上にも寄与すると考えたからである。

「協働的な学び」の効果を高めるためには、学級経営を充実し、児童生徒が違いを認めて協力し合える学級づくりを進めることが必要です。例えば、学級活動（ホームルーム活動）で行われる合意形成の活動は、他の教科等での学習の質の向上にも有効であることを念頭に学級経営を充実することなどが考えられます。

【出典：文科省学習指導要領教師向け参考資料

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実より】

さらに、自治的活動の意義や意図を理解し、学校全体でその指導が確立できるよう、具体的な授業（指導）モデルの研究をした。特に自治的活動の意義や意図の理解をする過程で、キャリア教育の視点（基礎的・汎用的能力の育成）と関連付けて活動を意味付けをすることで、学級活動や自治的活動の指導の必要性をより認識することができた。

### 1 研究の重点

自治的活動の具体的な体験場面を2つの側面で捉えている。学級活動と生徒会活動である。今回の研究では、その一つの側面「学級活動（学級会活動・学級討議）」に重点を置き、研究を進めた。自治的活動を展開する上での基礎基本は、生徒会活動より学級活動を基にして研究した方が「様々な要素を学ぶ」研究をすることができると考えたからである。

ゆえに、「学級活動における自治的活動の基礎基本を踏まえた上で生徒会活動に生かしていく」というビジョンで研究を進めていくことにした。さらに、学習指導要領の目標にある「諸課題について、生徒がその解決のために話し合い、合意形成したことを協働して実践する」にも着目をした。なぜなら、この経験が「自治的活動への主体性に大きく寄与する」と考えたからである。

学級活動は、共に生活や学習に取り組む同年齢の生徒で構成される集団である「学級」において行われる活動である。学級生活の充実と向上に向けて、生活上の問題を見付け、その解決のために話し合い、合意形成したことに協働して実践したり、個々の生徒が当面する諸課題などについて自己を深く見つめ、意思決定をして実践したりすることに自主的、実践的に取り組む活動により、現在及び将来の自己と集団との関わりを理解し、健全な生活や社会づくりの実践力を高めるものである。

（学習指導要領解説 特別活動編 学級活動の目標より）

その上で、学習指導要領解説「特別活動編」P42～P43の次の記述に焦点を当てた。

中学校において、「合意形成」を図る活動については、以下の点に留意する必要がある。

一つは、課題に対して、一人一人が自分なりの意見や意思をもった上で、合意形成に向けた話合いに臨むようにすることである。中学生の時期には、一般的に、他人の目が気になったり、自分の意見を主張することを躊躇ったりしがちである。考えの違いから摩擦が起きることを避けようと当たり障りのない発言をしたり、どうせ何も変わらないという意識をもっていたりもする。このように、自分なりの意見や意思を形成しようとする事自体に消極的になるということもある。このため、学級や学校の生活をよりよくする課題を自分事として捉え、解決に向けて自分の意思をもつことができるような活動の過程にする必要がある。

もう一つは、合意形成に基づき実践するに当たって、自分自身に何ができるか、何を行うべきかということを中心に考えて、意思をもつことである。合意形成を図る過程においては、それぞれの意見を主張しながらも、決まったことに対しては、協力しながら責任を持って自分の役割を果たしていくことが大切であるが、単に「決まったことだから、やるしかない」という受動的な姿勢ではなく、合意形成に基づき、集団の形成者として、自分の個性を生かして何ができるかを主体的に考えて意思をもって取り組むことができるようにする必要がある。

この二つの視点はそれぞれつながっている。学級や学校の課題を自分事として捉え、自分なりの意思をもって合意形成に臨んでこそ、合意形成したことに對して主体的に取り組もうという意欲をもつことにつながる。逆に、学級や学校の課題を自分事として捉えるということは、自分は、学級や学校の生活をよりよくするために何ができるかということを考え、意思をもって実践することでもある。

こうした点を大事にした活動の過程となるよう教師が計画的に指導することがあってこそ、合意形成を図る活動が、自主的・実践的なものになり得ると言える。

そこで、学級活動（学級会活動・学級討議）を意図的・計画的に進めていくために、私たち教師が身に付けなくてはならない基本的指導スキルについて共有した。

それは、「計画委員会の運営力」である。計画委員会の意図やねらい、また計画委員会そのものの解釈は、学級活動についての研究者や実践者によって、微妙な違いはあるが、本校では、計画委員会を「自治的活動を展開するための運営委員会」と位置付けた。

学級討議のねらいや目的の確認

計画委員会での役割分担



学級活動（学級会活動・学級討議）を進めていく  
基本的な生徒指導のスキル

**= 計画委員会の開催 =**



会場図・板書計画・進行の把握

班長の役割の確認

## 2 研究の進め方

具体的にはキャリア発達を促す視点の中で、「人間関係・社会形成能力を学級活動を要にして育成する」手だての研究をした。学校教育においては、基礎的・汎用的能力を育む視点でのバランスのとれた教育活動が求められる。それ以外についても述べているが、今回はあえて次の3点に重点を置いた研究を報告する。

重点

- (1) 具体的な計画委員会の運営
- (2) 計画委員会による学級会・学級討議の運営
- (3) 学級討議の基本的な進め方モデルの構築

+

キャリア発達を促す  
視点での他の取組

## 3 計画委員会および学級会活動・学級討議の実践例

### 【具体的な計画委員会の運営】

計画委員会の運営は、生徒の実態に応じて運営方針は異なる。成熟した学級集団と、発展途上であり、生徒主体の活動が整っていない学級とでは、方針は異なる。一つのマニュアルに則って、執り行うことなどできないのである。

しかし、基本的な運営という型を理解しておかねば、臨機応変にカスタマイズできない。そこで、校内OJTで議論が進められるよう、ガイドブックを作成した。

特別活動研究チーム資料

## 計画委員会の進め方ガイド

＝合唱コンクールスローガン版＝

計画委員会の進め方は、学級集団や内容、指導段階によって意図的・計画的に行うものですが、「必ずこの進め方」というものではありません。それを前提に本ガイドをご活用ください。

- 1 計画委員会の参加メンバーの選定  
学級担任（計画委員会主催者）や学年等の意向でメンバーの選定を行う。  
※基本的には、学級担任の仕掛けがあるので、学級担任がメンバー選定の権限を握る。
- 2 何のために計画委員会を行うか（計画委員会の目的の共有）  
計画委員会は単なる準備委員会ではない。生徒主体の活動・自治的活動というように、生徒が対象を自分事としてとらえ、主体的に活動に関われるようにするための準備委員会である。したがって、学級担任の思いをのせながらも生徒が主体的に考えたという形にもっていく学級担任のスキルや仕掛けが求められる。このスキルや仕掛けは、学級担任のねらいや学級担任の個性により様々な形となるゆえ、学級担任が自ら考え、行っていかねばならない。
- 3 基本的なシナリオ
  - (1) 学級全体に対して  
計画委員会のメンバーは、「学級生徒の了解や承認を得て学級の活動のために尽力する立場」ということを全員で共有しなければならない。メンバーの公募時や決定時に、学級担任よりこのことを明確に伝えねばならない。
  - (2) 計画委員会にて
    - ① 学級担任の合唱コンクールの活動に対する思いを話さねばならない。
    - ② 計画委員会のメンバー全員が、合唱コンクールの活動に対する思いを述べなければならない。
    - ③ ①②の思いを共有した後の「学級担任のセリフ」がポイントとなる。  
→「じゃあ、どうする？」  
「具体的に、どうやってスローガンを決めていく？」  
※このセリフを切り口にして、議論をしていく。  
具体的な方法が生徒から出るように学級担任がファシリテートしていく。  
(丸投げ・押しつけは厳禁)

### 【予想される展開】

- ・アンケートをとればいいんじゃない？
- ・学級会でみんなから意見をあげてもらって決めればいいんじゃない？

※ これら意見に沿って進めていくことは必ずしもNGではない。されど、この形で学級会をイメージしたとき、どのような学級会になるかを担任は想定し、良い形の会にできる裏付けをもっていなければNGである。学級会が一方的一部の意見での合意形成と見なされる形になったのであれば、計画委員会の意味はない。

【具体的な繰り返し】

- ・アンケートをどって、バラバラな意見が出たらどうする？
- ・学級会で意見が出なかったらどうする？
- ・計画委員会の思いと違う方向の意見がたくさん出たらどうする？

※ このような繰り返しをしないで、生徒の意見そのままで行わせ、意図的に失敗を経験させ、より良い形にもっていく方法もあるが、懸念事項も多い。学級担任が失敗の後のリカバリーをする労力も想定しておかねばならない。

基本的に計画委員会主催の学級会は、成功させるための会にする方向で臨む方が無難である。

しかし、そのためには計画委員会で生徒の意見を「ダメ出しする」意気込みで、様々な想定を考えさせる学級担任のスキルが求められる。

【臨機応変な学級担任の仕掛け】

計画委員会に慣れていない集団では、自分の考えをさらけ出すことができずに「沈黙」となる場合もある。そのようなときは、議論の流れをつくるための仕掛けが必要になってくる。

例えば、「アンケートをとるなどして、なぜクラスの個々の意見を吸い上げようとししないのか？」と学級担任が計画委員会の生徒に問えば、「うん、その通り！」という雰囲気になる。そうなったならば、「アンケートをどって、バラバラな意見が出たらどうする？」と問えばよい。「計画委員会としては困らない？」「困る！」「どうして困るの？」と繰り返しを重ねていけば、別な方法を考えなければという姿勢が共有できる。その雰囲気をもって、「ならば別な方法は？」と問えば、沈黙の呪縛が和らいでいるので、議論の動きが出てくる。

また、学級担任の「アンケートをとるなどして、なぜクラスの個々の意見を吸い上げようとししないのか？」問いかけに対し、生徒は〇〇だからという理由をたくさん述べる場合もある。ここで出てきた理由は、アンケートをとる方法も考えたが、その方法をとらなかった理由付け（根拠）とすることができる。

このように学級担任は、その場に応じた対応のスキルが求められる。大変であるが、一度のこの体験をすれば、このスキルは一生ものになる！

また、一方で原案を提示するという手法や、キーワードの原案を提示し学級会で練り上げるという手法もある。その他、学級担任の導きたい手法もあると思う。

導きたい様々な手法のどれを選択するかは、学級担任の専決事項である。

なお、迷ったり悩む場合は、先生同士で議論をして自らの進め方を決定していくことが重要である。

- ④ スローガンの決め方についての納得解（原案）が計画委員会で出たならば、その後は学級会に向けての役割分担等の話し合いになる。
  - ・計画委員会の組織作り
  - ・役割分担
  - ・学級会会場のレイアウト
  - ・時間配分
  - ・進め方（会次第）
  - ・資料（議案書やレジメ）
  - ・当日までと当日の準備
- ・【重要】うまくいかなかった場合の対応  
(分担はするが、全員が自分事として捉え、補足発言ができる状況を整えておく)
- ⑤ 学級会のゴールの確認
  - ・スローガンが決定する
  - ・スローガンの方向性の納得解を得て、計画委員会に具体案の一任となる  
のどちらかがゴール。
  - ・最後は学級担任の講評で閉じる。  
計画委員会のメンバーの労をねぎらうことはもちろん、学級全員の前向きな参加について、具体的な点を示しながら前向きな評価をする。

次に、ガイドブックを基に、各学年が学年の実態に応じて取り組んだ計画委員会運営計画を紹介する。本校では、計画委員会主催者である学級担任等がいきなり進めていくのではなく、学年会等で特別活動担当が案を示したり、先行して準備をしている学級担任が案を示したりするなどして、取組の〇JTを展開している。

このような取組を経て、「計画委員会」についてのノウ・ハウを理解できていなかった教員も自然と関心を抱き、何となくの準備からねらいをもった意図的計画的な準備へと教師自身の力量を高めることにつながられた。

さらに、アセスメントの研究のところで述べるが、学級担任は対象とする行事に対して、学級の状況を踏まえた上で計画委員会を運営する考えをもつようになった。

単なる行事の準備ではなく、「これを機会に学級の課題も克服していく」という目的をもった指導を考えるようになった。

実施案をベースにして、どのような視点で実践をしたかを以下に示す。

2024.9.17

第1回 第一学年計画委員会（主な流れ）

1. 計画委員会の趣旨・目的の説明【担任】

- 生徒主体の活動の場
- 合唱コンに向けて、計画委員会のメンバーに向けてエールを！

2. 計画委員会のメンバーから一言

- 合唱コンに対する思いや意気込み

3. 生徒による議論（スローガン作成の決め方についての議論）

- 先生、生徒の思いを共有した後、「じゃあ、成功させるためにはどうする？」「具体的にどうやってスローガンを決めていく？」などの切り口で、議論を展開。（※具体的な方法が生徒から出てくるように促す。）

～予想される展開と具体的な切り返し～

予想される展開	具体的な切り返し
*アンケートをとればいいんじゃない？	*アンケートをとって、バラバラな意見が出たらどうする？
*学級会でみんなから意見をあげてもらって決めれば？	*学級会で意見が出なかったらどうする？ *計画委員会の思いと違う意見がたくさんでたらどうする？



様々な場面の想定を考えさせる

4. 学級会に向けての役割分担を決める（スローガンの決め方についての原案が完成したら）

- すべてのメンバーに役割分担を（※メンバーでどのような役割分担を要するか決める。）

～主な役割分担（例）～

計画委員委員長	
学級会会場のレイアウト	
司会進行	
書記（板書）	
会次第作成	
資料作成（ワークシート、アンケートなど）	

5. 今後の予定について

\*9月27日（金）④学活 第1回学級会

- ここまでに、各準備を！

## 【具体例2 第2学年の実践】

### 第2学年計画委員会実施案 学級会「合唱コンクール編」

#### 【テーマ】

今回の計画委員会の大テーマを「学級力向上」とする。

各学級、この大テーマを意識して合唱コンクールの活動を通して学級力の向上が図れるように計画委員会を運営する。

#### 【当面予定】

○9月27日学級会 「合唱コンクールのスローガンを決めよう」

学級会の進め方やスローガンの決め方は、各学級の計画委員会で決定をして実践するものとする。ただし、学級目標や自由曲と関連付けてスローガンを立てる方向で展開をしたいと考える。

#### →留意点

- ・学級委員は、前期・後期の切り替えのタイミングであるが、学級委員が変更となった場合は、前期・後期のそれぞれの学級委員が共同で行うように配慮する。
- ・スローガンは、模造紙に書く！

#### →教師の行った仕掛け

- ・9月27日以前に、学年の3学級の計画委員を集めて説明会を実施した。
- ・計画委員会のメンバー一人一人に明確な役割を与えることで責任感をもたせて取り組ませた。
- ・計画委員会、学級会のあらゆる場面で「話し合いを通して納得解を出させること」の徹底を図った。
- ・学級委員は、学級会全体を見渡し、話し合いの仕方が安易に流れたり、計画委員会の意図しない方向に進んだりした場合は、毅然と話し合いの目的を改めて伝え、軌道修正の役割を果たせるよう、明確な責務を課した。加えて学級会の終末では、学級会の講評を皆に述べる役割も課した。同時に学級委員の的確な助言、かつ的を得た講評に対し、計画委員会としても感謝の意を示すことの意味（学級力の向上）を事前に周知した。

#### →教師の行った仕掛け

スローガンを模造紙に書く作業については、その分野で活躍できる生徒に場を提供する意図もあり、模造紙にスローガンを書くための計画委員会を募った。作成での協働作業を通して、学級のリレーションづくりにつなげた。



○10月11日学級会 「スローガンを達成させるための7ルールを決めよう（仮）」

スローガン達成のための具体的な方策・取組を決める。前回と同様に、学級会の進め方やスローガンの決め方は、各学級の計画委員会で決定をして実践するものとする。

ただし、決定した内容を「見える化できる仕組み」を作ることとする。

#### →教師の行った仕掛け

- ・案が出ずに学級会が止まったときの対応を計画委員会で話し合わせた。  
「案が出ない」ということがなぜ起こるのか、未然に防ぐためにはどのような仕掛けをしておけばよいか。また、学級会が止まった場合、どのような手だてで会を動かすのか、計画委員会としての策を考えさせた。（学級担任は、計画委員会においても案が出ない場合を想定して助言例や働きかけを考えておく。）

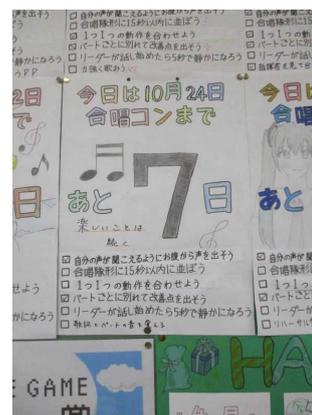
## 【各学級のスローガンの見える化】



A組：マンダラチャート



B組：ステップアップ目標シート



C組：日めくり目標カレンダー

○10月23日学級会 「合唱コンクールに向けてのこれまでの取組を振り返り、残り2週間の改善につなげよう」

9月27日、10月11日の学級会の流れを受けて、この時間の各学級の使い方は多種多様な使い方となる。各学級の計画委員会で決定をして実践する形は変わらないが、その計画委員会では学級担任の丁寧な助言をお願いしたい。

→留意点

- ・スローガンに込めた思いの確認だけでなく、7ルールの確認や見直しも考えられる。また、「これまでの振り返りシンプルに合唱を試みる」という手段も考えられる。

今回の学級会に向けた計画委員会では、学級担任がこれまでの計画委員会等の学級に対する運営や取組を適切に見取り、的確な助言をしなくてはならない。行事経験のある教師とは違い、経験の乏しい生徒たちは不安の中で活動してきたという認識をもち、ある程度の道しるべを示してあげなければならない。

そうでなければ、意図的・計画的に教師が計画委員会を運営していることにならない。

## 顕著な生徒の変容

- ・団結力が増した。
  - ・決め事をする際に、他の学級の仲間のことを考える生徒が増えた。
  - ・皆で行事を成功させよう、皆で授業を良くしようという発言が見られた。
  - ・学級委員会を中心に、「学年のために」「学級のために」と行動できる生徒が増えた。
  - ・生徒同士の学級会だからこそ、素直に意見が言えた。
- また、生徒がファシリテートしながらの学級会なので、より協力しようとする姿勢が見られた。

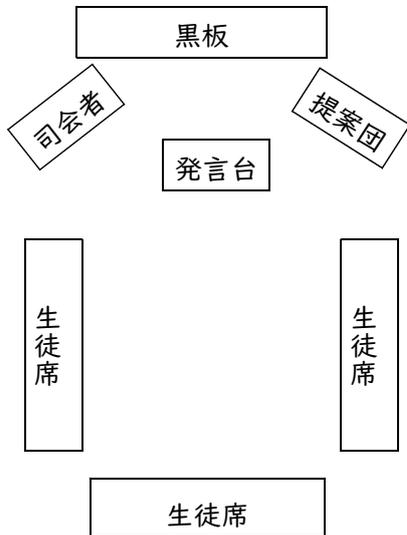
## 各学級の 合唱練習



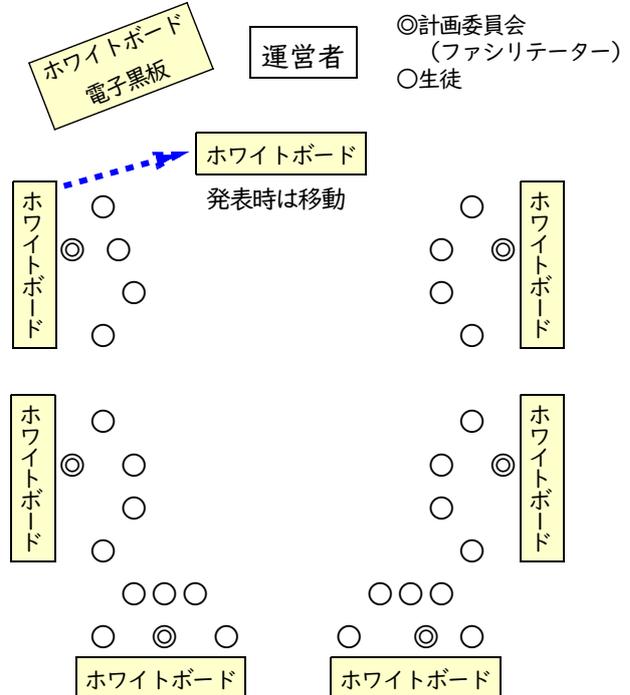
4 学級会活動における基本的な会場モデルについて

学級会活動における基本的な会場の形を研究し、その基本形を次のように整理した。

教室等での  
一般的な学級討議の会場図



多目的室等の大教室での  
ダイナミック展開の学級討議の会場図



計画委員会の各担当が司会・記録、提案団となり、各議案についてフロアと討議していくスタイル



計画委員会の代表がファシリテーターとなり、班討議を行うモデル。  
班内で「納得解」を得たり、各班のプレゼンを経て学級における「納得解」を模索するモデル

実際には多目的室等の大教室は一つしかないもので、どうしても教室での学級討議が基本線になってしまう。しかし、将来的には「議論の形」も有意義な形にアップデートすべきと考える。

40人学級以前は、教室内のレイアウトを上記左のように作ることすらできなかった。しかし、40人学級や35人学級が定着し、スペース的に厳しい面は否めないが、上記左の形を作ることが可能になっている。されど、上記右の形での学級討議もできる環境を整えるべきと考える。



## 5 キャリア発達を促す視点での仕掛け

特別活動等についての研究では、「学びの主体者」の育成についてキャリア教育の視点を大事にしている。基礎的・汎用的能力は、未来の社会の参画者として「身に付けさせたい能力」である。生徒のキャリア発達を支援し、キャリア形成能力を育成する仕掛けとして、先見の時間の設定と夢手帳の活用、ピア・サポートプログラムの実践を行っている。

### 先見の時間

### 夢手帳の活用

### ピア・サポートプログラム

#### ※先見

出席確認後、夢手帳の基本行動時間の記入や手帳にある予定の確認をしたり、先々の取組について考えたりする「自己との対話」の時間。時には、学級担任が生徒に、将来の生き方を考えさせたりする仕掛けの時間。本校では毎朝10分間、この先見を行っている。

#### ※夢手帳

「スコラ手帳」という一般の手帳にはない学校向けに最適化された機能をもった手帳。起床、勉強時間開始、就寝時間等が固定化され、習慣化に繋がるよう工夫できる構造化がされている。加えて、自分自身の振り返りコメントや日記・備忘録としての活用もしやすい手帳である。

#### ※ピア・サポート

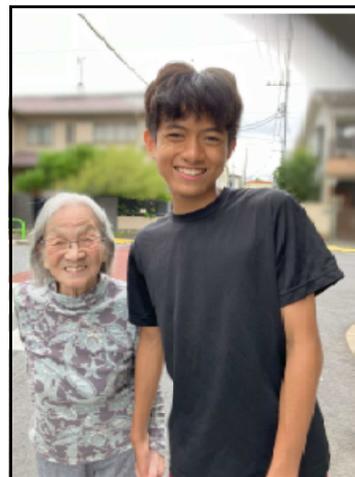
「誰もが成長する力をもっている」「誰もが自分で解決していく力をもっている」そして「人は実際に人を支援する中で成長する」とするピアサポートの理念は、社会連帯の自覚を育む指導をする上で、踏まえておきたい理念である。

特に、「人は、実際に人を支援する中で成長する」ということを念頭に置いた指導は、各教科・道徳・特別活動、総合的な学習の時間等の教育活動における協働学習や協働活動に通じるものである。そのような考えのもと、令和6年度は従来の職場体験を、ピア・サポートプログラムとしての「福祉体験学習」という形で実施した。

また、日本赤十字社の協力による“災害時の避難拠点のレポート”を活用した、「中学生にもできること」「中学生も立派なマン・パワー」という視点でのピア・サポートプログラムを計画している。



福祉体験学習（事業所内での作業）



寄り添いの支援

## 6 生徒会活動とまがたまプロジェクト～目的の異なる自治的活動～

生徒会活動は、主に役員会が中心となり、様々な取組を行っている。その時代時代の役員等が生徒会の役割や目的を議論し、「一人一人が役割を担った取組」を通して学校生活が円滑に充実したものになるよう運営をしている。本校の生徒会会則ではこれらの活動は本校の教育の理想に向かうものと定義されている。つまり、本校の生徒会活動は学校教育を支える重要な柱の一つなのである。一方で、本校には「生徒の生徒による生徒のための活動」としてのまがたまプロジェクトがある。これは学校教育に対してではなく、そこに集う皆のための活動である。そこに集う人たちが前向きな姿勢で元気が出なければ、充実した活動にはならない。これは、そのような元気を引き出すためのプロジェクトである。

生徒会活動としての垣根を越えて、生徒が主体的に考え、豊かに成就感をもって成長できる取組を生徒自らの手で行う経験はとても大事である。学校であるがゆえに、生徒会活動という既成概念で、生徒が考える取組が制度的に予算的に制限がかかってしまうことがある。そこで本校では、生徒自らの手でより良い学校生活を創るための様々なプロジェクトを企画・立案し、PTA役員にプレゼンテーションを行うことで、教員以外の大人から直接的な助言等をいただいたり、プロジェクトに必要な予算を用立ててもらったりする仕組みを構築している。

プロジェクトメンバーによる  
プレゼンテーションの様子



令和5年度



令和6年度



成果例

キャラクター名、デザイン等全てプロジェクトで公募、制作まで行った。ファイル印刷のみ発注。今年度は、全校生徒全員でチューリップの球根約300個を植えた。他の企画も現在進行中。